

春季講演会

柳原白蓮と別府

矢 島 嗣 久

一 白蓮の出生

明治十八年（一八八五）十月十五日、燐子あきこが生まれる。

生後七日目に生母奥津りおくつりようのもとから引き離され、父親の柳原家に入籍、小学校入学まで里親増山あきこくへの家（品川在、種物問屋）で育つ。明治二十一年（一八八八）十月、生母奥津りあきこようは、燐子（白蓮）が三歳のとき病死。

燐子あきこの父は柳原前光さきみつ。柳原前光は、幕末から明治時代にかけての山城国京（京都）出身の公家で、後に伯爵。大正天皇の生母・柳原愛子なるこの兄。大正天皇と燐子あきこは従兄弟の間柄である。

柳原前光は戊辰戦争では、東海道鎮撫副総裁となる。明治維新後は外務省に入省、外務大丞として日清修好条約を締結する。

柳原燐子あきこ、白蓮の母は、新見正興しんみまさおきの三女、おりようである。おりようは幕末、新見家が江戸末期に没落後、二番目の姉である。

つと共に奥津家（品川の種物問屋）の養女となり、柳橋の芸者となった。

明治天皇の側室で大正天皇の生母である柳原愛子なるこは、燐子あきこの父柳原前光さきみつの妹である。したがって燐子あきこは大正天皇とは従兄弟とこにあたる。

燐子あきこの母方の祖父は新見豊前守正興しんみまさおきという。幕末の外国奉行で、小栗忠順ただまさや、福澤諭吉たけふくらを従えて太平洋を渡り、米国大統領に謁見した程の人物である。だが、明治維新によって一家は没落、娘二人は柳橋に売られて芸者になった。

万延元年（一八六〇）、新見正興は日米修好通商条約批准書交換使節団の正使として渡米した。新見正興が乗船したアメリカ船の名前はポーハタン号という。随行した幕府の軍艦は咸臨丸かんりんまるであった。一行は帰国したとき、明治維新が行われていて、幕府は倒



新見正興（しんみ・まさおき）

向かって左から村垣範正、中央、新見正興、右端、小栗忠順（ただまさ）

れてしまっていた。

新見正興は元治元年（一八六四）九月に免職となった。正興は明治二年（一八六八）十月に病没した。新見家は明治維新後の混乱の中で没落する。

二 最初の結婚

新見正興（白蓮の母方の祖父）は正妻との間に娘が三人いたが、長女は北海道へ嫁ぎ、次女・あつと三女りようは奥津家の養女となり、そこから柳橋（元東京都台東区）に芸者として売られた。あつは吉原遊郭元締めの飯島三之介と結婚する。三女、おりようも柳橋の芸者、柳原前光の側室、妾となり、燐子の後の白蓮を生む。三女りようは十六歳のとき、前光に囲われて、十八歳で女兒（のちの柳原白蓮、燐子）を出産。女兒は前光の正妻・初子に引き取られた。りようは明治二十一年（一八八八）十月に死去した。

明治二十七年（一八九四）、燐子が北小路随光の養女となる。

明治三十三年（一八〇〇）、燐子が瑞光の息子資武と結婚する。

翌年、燐子が十五歳で功光を出産する。

明治三十八年（一九〇五）、燐子が北小路資武と離婚する。

燐子、二十歳。

北小路功光が五歳のとき両親が離婚する。明治三十四年（一九〇一）四月、生まれ。一九八九年（平成元）二月、死去。享年八十九歳、歌人、香道師。昭和天皇とは又従兄弟。

香道とは、日本の伝統的名芸道で、一定の作法のもとに香木を焚き、立ち上がる香りを観賞するものである。

明治四十一年（一九〇八）、燐子が東洋英和女学校に入学。在学中、佐々木信綱の竹伯会歌会に入門。白蓮とは師匠の佐々木信綱がつけたと云われている。

九条武子も一緒に短歌を学ぶ。九条武子は大谷光瑞の妹。京都西本願寺の出身である。九条武子の夫は九条良致の九条家の三女、籬子は大谷光瑞の妻方、妻である。籬子の妹、節子が大正天皇の皇后である。大谷光瑞はシルクロードの大谷探検隊を第三次まで実施した。

終戦後、病を得て、別府で療養し、昭和二十三年（一九四八）十月五日、別府で遷化（死去）した。享年七十三歳。

三 伊藤傳右衛門との再婚

燐子は明治四十四年（一九一一）三月、福岡県飯塚の炭鉱王、伊藤傳右衛門と結婚した。燐子二十五歳、傳右衛門五十歳、いずれも再婚である。新居は伊藤家本宅、福岡県飯塚の

幸袋である。

大正五年（一九一六）、別府の伊藤別荘、工事を開始した。翌年暮れ、別府の伊藤別荘が完成、庭園は翌年の年末にできあがった。

大正九年（一九二〇）、宮崎龍介が、編集者として別府の伊藤別荘を訪れる。

翌年一月下旬、九条武子が別府の白蓮を訪れる。



柳原燐子、白蓮

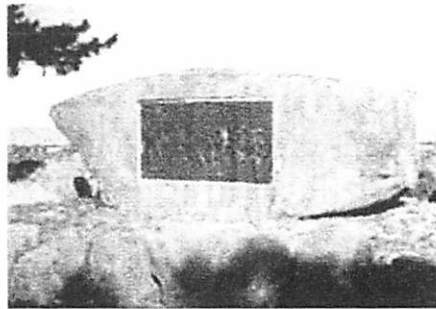


伊藤傳右衛門と白蓮の結婚写真

九条武子の歌碑

やわらかき 湯気に身をおく われもよし

今宵おぼろの 月影もよし 別府上人ヶ浜公園



九条武子の歌碑（別府上人ヶ浜公園）



飯塚幸袋、伊藤傳右衛門邸

四 白蓮事件

大正十年（一九二一）十月二十日、白蓮が家出を決行、燐子三十六歳、宮崎龍介二十九歳。

十月二十二日の大阪朝日新聞、朝刊に燐子の家出の記事が掲載される。「私は今あなたの妻として最期の手紙を差し上げます。今私がこの手紙を差し上げるといふことは、あなたにとっては突然であるかも知れませぬが、私としては当然の

結果に外ならないので御座います」。以下省略。

宮崎龍介、大正・昭和期の編集者・弁護士・社会運動家。出身地、熊本県荒尾。

大正十年（一九二一）十月、燐子と龍介の二人は義理の姉、信子に連れ出され二人は引き離された。



宮崎龍介と燐子（白蓮）



別府の伊藤別荘「赤銅御殿」

五 香織とふき

大正十一年（一九二二）五月、燐子が男児を出産。龍介は燐子の出産を人づてに知って男児か女児か不明のため、どちらでも良いように香織かおりと命名した。

大正十二年（一九二三）九月一日の関東大震災の後、龍介

と燐子が一緒に暮らすことが出来た。燐

子は長男香織と共に宮崎家

に入る。

十一月、燐子

は華族を除籍される。以降、

病身の夫龍介を支えて、「柳原白蓮」、「柳原燐子」の筆名で活動する。

大正十四年（一九二五）九月、長女の落苺ふきが誕生。

六 香織の戦死

別府の伊藤別荘は戦前、海軍将校クラブとして使われ、山本五十六いそく大将も白蓮の部屋を使用していた。昭和十八年（一九四三）四月十八日、戦死後元帥となつて国葬が行われた。

鹿児島間鹿屋海軍航空基地にて、終戦の数日前、昭和二十年（一九四五）八月十五日の終戦の数日前、早稲田大学から学徒出陣中の宮崎香織がアメリカ空軍の機銃掃射で戦死し



左から燐子（白蓮）・長女、落苺（ふき）
龍介・長男、香織（かおり）

た。

伊藤別荘は、戦後アメリカ軍に接収されていたが、後に別府商工会議所会頭も務めた首藤克人が買収、二年がかりでホテルに改修した。

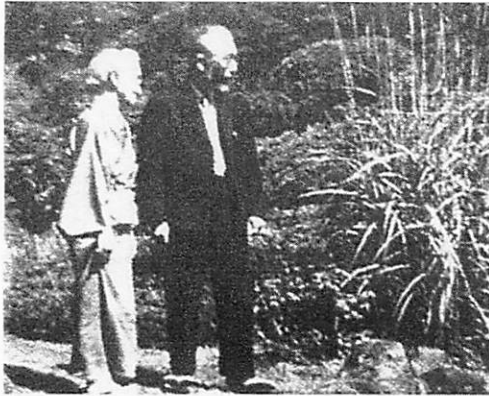
新たに七室の別館を設け、昭和二十九年（一九五四）九月、「ホテル赤銅御殿（あかがねごてん）」としてオープンした。



首藤克人

七 白蓮の別府再訪

昭和二十九年（一九五四）九月二十三日、別府の「ホテル赤銅御殿」に宮崎燐子、白蓮を招いて白蓮歌碑除幕式を開催した。なお、式の後、短歌会を開催している。



ホテル赤銅御殿を訪れた晩年の白蓮と龍介夫妻

白蓮の歌碑

和田津海の

沖に火もゆる

火の国に

我あり誰そや

思はれ人は

再びは

来じと思ひし

窓により

庭の木立に

秋の声聞く

白蓮

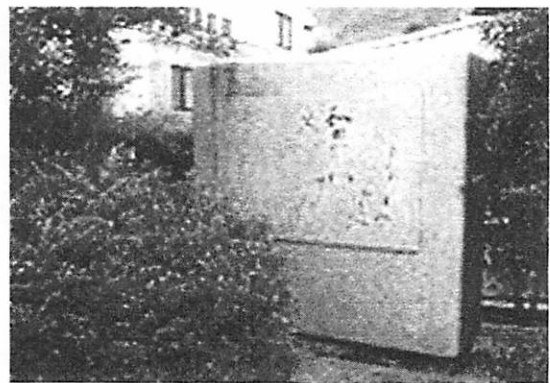
翌年、六月二十四日には、宮崎龍介と白蓮夫妻を招待、短歌会を開催している。

八 白蓮の晩年

月影は わが手の上と 教へられ

さびしきことの すずろ極まる

昭和三十六年一月、緑内障にて両眼失明。



白蓮歌碑、別府市

昨日と云い 今日とくらして うつそ身の

明日のいのちを わが生きむとす

昭和四十二年（一九六七）二月二十二日、燦子が死去。享年八十一歳。

昭和四十六年（一九七一）一月二十三日、宮崎龍介が死去、享年七十八歳。

昭和五十四年（一九七九）十二月、別府の伊藤別荘（ホテル赤銅御殿）が解体される。のち高級分譲地となる。



新別府にある仏壇



宮崎菫（ふき）、黄石、親子

参考引用図書（写真の出版含む）

永畑道子『恋の華・白蓮事件』

新評論、一九八二年

（文庫版）文芸春秋、

一九九〇年。再版・藤原

書店、二〇〇八年）

林真理子『白蓮れんれん』（中

央公論社）

『別府歴史散歩、泉都有情』

西日本新聞社、平成五年

『別府史談』二〇〇二年 第十六号「白蓮と伊藤傳右衛門」

矢島嗣久

『文芸春秋』二〇一四年八月号、「私と妻、白蓮のことすべてお話し

ます」宮崎龍介

『文芸春秋』二〇一四年八月号、「村岡花子が残した随筆」村岡恵理

『文芸春秋』二〇一四年九月号、「白蓮に逃げられた炭鋺王の遺言」

石井妙子

『花子とアン』私のブームは何度も来る 三輪明宏、文芸春秋、

二〇一四年十月号

白蓮の「矛盾」、読者の声、『文芸春秋』二〇一四年十月号



大正浪漫、幻の華、白蓮